

高齢者と小学校の交流を通じた地域づくりの取り組み

施設でのお年寄りの生活や、年をとることはどのようなことなのかなどを考えてほしいという思いから、交流学习が始まった。受身の学習ではなく、自身で「考える」という点を重視し、グループワークを取り入れた活動や体験学習などの取り組みを実施していった。

活動を通して、小学生の利用者に対する接し方や意識などの変化が見られるなど活動の効果がでている。

社会福祉法人 **恵仁会**

〒893-0024 鹿児島県鹿屋市下祇川町1800番地

TEL：0994-43-2546 / FAX：0994-43-2937 / E-Mail：info@kanoya-choujuen.jp

【法人の概要】

法人設立年：昭和44年1月14日

経営施設、事業（数）：13施設 7事業

経営施設、事業（種別）：

特別養護老人ホーム…1 / グループホーム…2 / 小規模多機能施設…1 / デイサービス、ミニデイサービス…3 / 居宅介護支援事業所…2 / 訪問介護事業所…1 / 鹿屋市委託事業（高齢者等訪問給食サービス、高齢者等世話付き住宅、地域包括支援センター）…3

【法人の理念・経営方針】

(1) 経営理念

地域における社会福祉事業の担い手として責任のある立場を自覚し、安定した経営基盤を構築するとともに、提供するサービスの質の向上及び経営の透明性に努める。

(2) 運営の基本方針

- ① 私たちは、利用者が求めるサービスの提供にあたっては、個人の尊厳を旨とし、創意工夫された最高のサービスを、笑顔と真心を持ってお届けします。
- ② 私たちは、利用者が求めるサービスを安全・安心・安楽に提供することによって得られる信頼を基に、すべては利用者の自立と生きがい、豊かな老後を支える活動であることを自覚します。

実施施設の概要

施設名：鹿屋長寿園、ふれあい、デイサービスセンター鹿屋長寿園、哲ちゃん家

施設種別：特別養護老人ホーム、認知症対応型共同生活介護、デイサービスセンター、小規模多機能型居宅介護事業

活動開始年：平成17年4月

活動の頻度・時間：月2～3（回）、1回あたり1～4（時間）

活動の対象者：地元の小学校5年生、施設利用者、地域の高齢者、住民

活動実施の背景、実施にいたった理由

今回の活動実施の背景として、法人内に「研修研究プロジェクト」という法人としての地域貢献や法人内の勉強会組織を立ち上げたことがきっかけにある。その中で、今回の取り組みを行うこととして持ち上がった当初の問題が、これまで様々な形で、小・中・高校生のボランティアの受け入れを行って行く中において、子供達に特別養護老人ホームというところがどのようなところなのか。施設で暮らしているお年寄りの人たちはどのような生活を送っているのか全く理解されることなくボランティアの受け入れを行ってきたように思われたこと。また、そのような中において受け入れの依頼をされる学校の先生方も、受け入れ側の施設側も何を伝えたいのか、何を学んで欲しいのか漠然としているものがあつた。

今回、活動の実施にあたり、子供達にもっと施設でのお年寄りの生活のことについて知ってもらいたい。日頃触れ合うことの少ない子供達に年をとることについて考えて欲しい。また、自分だったらどう感じるのか、どう思うのか考えて欲しい……。そのような思いから今回の活動が生まれた。

実施内容

今回の取り組み実施には地元の笠野原小学校の校長先生との出会いが大きなきっかけであった。私達の取り組みに耳を傾けられ、年間の総合的な学習の時間から24時間を提供してくださったことから今回の実施が始まった。

実際の実施内容として、子供達自身に考えてもらうことを前提に様々な形でのカリキュラムを学校の先生方と話し合いながら行ってきた。年をとり体が不自由になるとどうなるのか……。車イスの体験やアイマスクでの盲人体験。「もの忘れ」と「認知症」の違いなど様々なスライドや写真、実際の体験を通して子供達自身に体験してもらい考えてもらった。また、実際に体験した中からどのように感じたのか、また、相手の立場に立ってみるにより、どのような声掛けをして欲しいか、どのような言葉かけだと安心す

るのか……など、相手の立場に立った考え方も自然と感じてもらえるようなカリキュラムの作成を行ってきた。特に「考える」という点を重視して、グループワークを取り入れた活動も多く、より身近な地域に出て体験することによって、具体的に身近に感じてもらえるよう施設内、学校内だけにとらわれず地域にも視点を向けた取り組みを実施していった。

活動効果

取り組みへの留意点として、同じユニットでの関わりをすることにより（同じ利用者と子供達が継続的に関ることにより）、子供達、利用者、職員共に顔見知りの関係が生まれ、より親密に、より具体的に関わりが持てるようになってきた。また、その取り組みを父兄や地域の方々のいらっしゃる場で発表することにより、この取り組みの広まりや周知を図っていくことができつつある。そのような関わりの中から子供達の反応も交流開始当初より大きく変わってきた。はじめ恐る恐る遠巻きに見ていた子供達が、3回目の交流の際にはどうしたら喜んでもらえるかを考え、手を握り、同じ目線で声を掛け合っている。

また、アンケート等で見られた「かわいそう」「あんなにはなりたくない」というような反応も「やさしく声を掛けてあげたい」「大丈夫だよ」という言葉に変わってきたことなど……。このような取り組みが認知症の方々への視点や対応について大きな変化へと結びついてきているのではないかとと思われる。

今後の課題

この活動の本質は、交流学习を通して、単に子供とお年寄りが楽しむことだけではない。そこに関わる全ての人々が相互作用しあう中、弱い立場の人を慈しみ、同じ人として互いにいたわりあって共存できるよう人として認め合い、成長することが大きな目的である。

今後の課題として、今回の関わりの中から生まれたお年寄りとお年寄りとの交流を単発的な一年限定の関わりとして終わらせるのではなく、この子供達が中学生、高校生へと成長していく中において法人としてどのような関わりや支援ができるのか……そこにこれからの法人として

の課題が見えてくるように思われる。そのためにもこの取り組みがより地域や社会に根付いた形での展開を行っていくことが今後の課題であると考えられる。

主な経費や財源の内訳（年間あたり）

<主な経費>	<概算額>
事務消耗品費（コピー代等）	¥8,000
通品費（電話代他）	¥10,000
雑費（ガソリン代他）	¥10,000
<合計>	¥28,000

<主な財源>	<概算額>
・施設負担額	¥28,000
<合計>	¥28,000

